

レベリングのヒーローアカデミア！

アルミサラミ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

・父の個性 「プロゲーマー」：どんな初見の鬼畜ゲームも難なくクリア、攻略してしまうぞ！・母の個性 「大器晩成」：時が経つに連れて才能や身体能力が上昇（中）していくぞ！

そんな両親から生まれた俺の個性は：「ステータス」

父の個性のゲームの要素と母の個性、大器晩成が絶妙に混ざりあった個性であり、最早「個性婚」を疑われても仕方ないほどに強力な個性であった。

うん、ま、まあ超常は日常に変わったんだしこれくらいは普通だよね！

そんな僕が行くヒーローアカデミアの物語

目次

強制レベリング	1
レベルアップのために	4
実技試験の始まりは爆炎と閃光と	10
実技試験!!	18

強制レベリング

事の始まりは中国軽慶市にて、発光する赤子が生まれたというニュースだった。

それ以降、各地で『超常』は発見され、原因も判然としないまま時は流れる。『超常』は『日常』に、『架空』は『現実』に成り代わっていった。世界人口の約8割が何らかの特異体質を持つ超人社会。それが現在の世界の実情である。

そしてそんな混乱渦巻く世の中で、誰もが1度は空想し憧れた1つの職業が、脚光を浴びている。

“ヒーロー”。

世は、その新たな職業を、何てことはないように受け入れている。当然、ヒーローを目指す人のための学校も存在し、その中で有名な高校は雄英高校、士傑高校などが上げられる。もちろん、「ヒーロー」を職として希望するものは多くそれらの高校の倍率はほぼ300倍と馬鹿げた数値を示しているのであった。

ここにもその「ヒーロー」を志すものが一人…

「こらっ悠真！サボらないの！」

「ぐっうううう!!!ムリムリムリムリ!!もう腕が限界だよ!!!」

「また途中で止める気!?んなこと言ってる他の子に負けるわよ!?そしてヒーローを志すのなら簡単に諦めないの! plus ultra aよ! 後10回!」

「この鬼畜母さんがああああ!!!」

こんにちはは！僕は榊 悠真さかき ゆうまって言うんだくちなみに今は腕立て伏せしてるんだ！それも11564回。あ、なんでこんな中途半端か気になったでしょ。それは僕の個性が関係してるんだあ。僕は「ステータス」っていう個性でね？最初は身体能力が表示されるだけの『没個性』なのかなって思ってたんだけどさ、虫潰したとき聞こえたんだよ。

『レベルアップしました』

ってね。そのあとはもうビックリしたね。身体能力が半端ないほどに上がってるんだもん。バク宙できたし…

それで母さんに伝えたらね、その時から僕のスパルタ教官になったのさ…

母さん曰く、『絶対その個性は没個性なんかじゃない。ヒーローにだってなれる！私は大器晩成っていう個性だったからさ、子供だったときにヒーロー科のある学校に行けなかったの…悠真には同じ思いをしてほしくないし…うん！悠真！特訓しよう！』

ってことで個性詳しく分かった後に8歳でやれる特訓じゃねえだろ…って感じの特訓をしまくったら一気にレベルアップしてさ…9まで上がったんだよね…

やっぱりステータス上の数値は跳ね上がってて土の地面を殴ると痛みを感じないくらいにはなってる、殴った部分がめっちゃ凹んでたね。

強くなることに喜びと達成感を覚えた俺は、俺自身の希望で母さんによる特訓が継続してやるようになって、地道に上げるようになって…今に至る。その間にも個性で分かったことがあるけどそれは後でね。

経験値があと11564溜まればレベルアップでき、腕立て伏せや腹筋とかスクワットとか一回で1上がるって気付いてね、子供のときに親に言ったことがあるんだよ。そしたら案の定、『元々の筋力を上げるためにも丁度良いし、一石二鳥じゃない！』と大喜びして俺にやらせたんだよ…レベルが上がることに必要経験値が多くなってくつてのに…

「ぐっぬあああああいちまんっ!!!せんごひやくろくじゅうよんらんらん!!!」

頭にアナウンス?が響く

《レベルアップしました。》

僕は地に倒れ伏した。

「もう無理です手が動かないです助けてください母さん」

「ん？何言ってるの？自分から特訓つけてって言ったよね？休む暇な
んか、無いよ？」

黒い笑顔で笑う母さんは僕にとって悪魔にしか見えなかった。

でもまあ、何気にレベルアップの時のこの過程が一番楽しいんだ。
ぶっちゃけて言うとな、レベルアップして力上がるじゃん？でも体重
変わらないじゃん？個性使って力あげて腕立て伏せしても経験値1
入るんだよ…

なんで個性使わないかと言ったら、まあ、個性封じられたときの筋
力とか基礎体力とかの向上かな？

自分はもしかしたらDM…かもしれない…？

そんなことを考えながら、腹筋をする。

ただいま、レベル27に突入…

レベルアップのために

場所は辺須瓶中学校。俺が通ってる中学の名前であり、もうすぐ卒業である。

そして今、担任の先生から進路相談を受けていた。

「お前らは雄英高校のヒーロー科を受けるんだったな。実技試験はともかく筆記試験の方は大丈夫なのか？ なんとたつて300倍たぞ？ 300倍。」

辺須瓶中学の俺らの担任の先生は何度も聞いてくる。

「あ、もう僕は平気ですけど。多分中学の問題の応用全部解けますよ。」

「まあ、お前はいつも定期テストとか実力テストで90以上取ってるから心配は無いが…耳郎はどうだ？ ちよつと不味いんじゃないのか？」

ニヤケ面をする先生に、僕の幼馴染みの耳郎響香は耳たぶのプラグを弄りながら言う。

「いや、先生、その顔で言われても…ウチのテストの結果見ててそう言ってるなら他の人はどうなるんですか？」

「フハハハハ。つまらないな二人とも雄英を受験するつてのにその余裕な態度。受験生ってのはもつとこう、オロオロして落ち着かない状態のはずだぞ？」

「先生、性格悪すぎ(です)。」

先生の言い草に響香とハモってしまった。

「いや、悪い。冗談だ。他の生徒なら絶対に雄英のヒーロー科は受けさせなかったがお前なら安心して受けさせることができる。絶対に受かれよ。」

「当たり前です。ヒーローになるために今まで努力してきたんですから。」

「悠真と同意見です先生。ウチはヒーローになるんです。」

俺たちの自信に満ちた返事を聞いて苦笑する先生。

「そうか、頑張れよ！ plus ultra! ってな。あ、お前らで進路相談最後だから、教室の窓とか閉めて帰ってくれなく」

—————

—————

—————

——

もう辺りは暗く、綺麗な星空が見える。

帰り道、響香と歩きながら話をする。

「あくもうここまで来たんだなあ！ 雄英に行くの楽しみだ！」

「それは受かったこと前提でしょ…受かるとは決まってる…」

響香は呆れた顔で言う。

「あれ？ 響香受かる自信あるんじゃないの？」

「あるにはあるけど…やっぱり不安じゃない？」

「響香なら大丈夫に決まってるよ。今まで勉強相当頑張ってたじゃん。あんなに努力して受からなかったら雄英の先生たちを真っ先に疑うね。」

「…悠真はウチを買い被りすぎだよ…」

顔を赤くして僕から背ける響香。アレだよ。響香たまに乙女力ハンパないよね。可愛い。

「買い被ってる訳じゃない。今まで響香の努力を近くで見えてきたからこそその確信だよ。自信持ちなってる。」

「い、一番努力してるあんたに言われたくないね！ 今日なんかまともに箸使えてなかったじゃん！ 腕全体がひどい筋肉痛なんじゃないの！？ レベルのためとはいえ、根詰めすぎだよ…あんたじゃなくてあんたの母さんだけだよ…」

「仕方ないよ。入試近いし実技試験では個性が重要になるし出来るだけ一番良い状態で受けさせたいんだろうな、母さんは。」

それに、元を辿れば俺が自分からお願ひしたんだ。個性使って筋ト

レとかすれば楽にレベルアップできるけどさ…簡単に終わっちゃうとき、達成感というか、何と言うか…ちゃんと体に現れて欲しいと言うかね。

つまり、母さんのせいじゃなく俺がわざと追い込んでんの。しかし、…よく見てたな…そんでよく分かったな…そうか、ストーカーか…」

「あんまり冗談言ってるって個性で心臓破裂させてやろうか？」

「笑えないし、それ犯罪だからな!？」

「まあ、こつちこそあなたの努力を見てきたからこうして頑張ってるんだよ。あなたの努力に当てられたってわけだよ…あ、ウチの家こつちだから、じゃあね!」

「おう、気をつけて帰れよー」

行ったか…さてさて、僕も帰りますか…はあ…どうせ帰ったらすぐに特訓なんだろうな…必要経験値は、つと…うええ!あと1300000!?!最悪だ。

せめてあのスキルを取れたらなあ…母さんは今焦って決めると本当に必要なときにSP足りなくなるって脅さ…言われたし。雄英の試験が近いからスキル取っていいって言われたから今のうちに構成でも考えておくか…

仕方無いのかなあ…とにかく、腕立て伏せ130000回は逃れないと…

組手ならまだましかなあ…筋肉痛は全くといって治ってないけどね

はああああ…レベルアップのために頑張りますか…つと、その前に…

「こんばんわあ。榊さんよお。一人かい?こんなところ一人で歩いてたら…危ないよおお!!」

相手は手から粘着性のある糸を放出してくる。

暗いから見えにくいけど

おい、それ個性だろ。犯罪だ！おまわりさーん!!

なんて言ってもすぐに来るわけないしな。自分で対処するしかない。

はあ：また来たよこういう輩…。俺の個性目当てでヴィランに引き込まうとするやつ…まあ、慣れてるからいいや。こういうのはおいしい経験値になるからなあ。

「毎度毎度来てくれてありがとう！せいぜい僕の糧になつてくれ！」

放出してきた糸を紙一重で避けながら接近、手刀で首筋目掛けてかなり手加減した一撃を叩き込む。え、何で全力でやらないのかって？ハハハ、君はスプラッタなグロ画像でも見たいのか？人間バージョンの「アン？ンマ?!新しい顔よ〜！」それにそんなことしたら僕が捕まっちゃうよ？いくら正当防衛でもね。

かなり弱めの手刀、それだけでヴィランは白目を剥いて倒れこんだ。

「まあ、チンピラ程度ならこんなもんか。母さんの方が全然強い。」

と、ステータスを開いて取得経験値を見る128000に減ってた！20000はデカいね。なんだって腕立て伏せ20000回だからね！まあ、殺せばもつと貰えるんだけどね…

倒れたヴィランは…うん。放置でいいだろ…

あ、そうそう、訓練がきつすぎてヴィランになるんじゃないや…？とか思った人、いるでしょ？俺の目標はヒーローなんだからその敵になるわけない。さつきも言っただけど、この訓練は自主的にやってるものなんだ。

あともう一つヒーローになりたい理由がある。

僕もオールマイトに憧れを持った大勢のうちの一人である。ヒーロー飽和社会の中でら平和の象徴、オールマイトの力は絶大だ。

しかし、そんなオールマイトだって年を取る。どんなに力を持つ人もいつしか死んでしまうんだ。

だからこそ、オールマイトの後継が必要だ。絶対的な抑止力はいつだって必要だった。個性が発覚する前は核兵器っていう抑止力が存在していた。その存在だけで大きなその抑止力であるオールマイトがいなくなつて起こる現象、それは様々だろう。ヴィランの増加、犯行も増えるようになる。そうなたら世界の混乱は免れない。

だから、僕がなるんだ。絶対的な抑止力に…

っていう、一種の野望、将来の夢みたいなものさ。

—————

—————

—————

—————

チンピラヴィランを倒して2000もの経験値を手に入れた俺は浮き足立っていた。そう、俺は一番敵にはいけない人を敵にしたのだ…

「ただいま〜!」

扉を開けたそこには母さんが鬼のような形相で、その周りの空間が揺らめいているように見える…

あれえ…?新しい個性でも発現したのかなあ…?う?

「…やつと来たわね…いつもより3分遅い…3分なんて180回腕立て伏せができるわよ?」

「でも、母さ…」

「言い訳無用!さっさと訓練するわよ!入試まで少ないんだから無駄にしている時間なんて無いのっ!残りの必要経験値はっ!」

「あ、あと128000です…」

「大分必要経験値が増えてきたわね…あと4日だから…4で割って筋トレのスクワット、腹筋、背筋のどれかを30000回と…8000は組手でやるとして一時間で1000だから二時間を4日…ね…」

俺は母さんの呟きを聞き逃さなかった。

あの、今日筋肉痛で腕が動かないんですが大丈夫でしょうか。その後組手？ハハッ。なんだろうー悪夢でも見てるのかなー。

頬をつねってみる。あれえ？痛いな、夢じゃなくて現実なのかな。何度やっても悪夢から覚めることはない。

「悠真！サボってないで早くしなさい！！あ、別に良いのよ？無理なら無理で。明日に倍になって返ってくるだけだからね？」

「すぐやります！はい！直ちに！」

悪夢が…始まった…

ちなみにこの後の四日間、箸が握れなくて響香に本人の提案であーんしてもらって周りから生暖かい目で見られたのはめっちゃ恥ずかしかった。

実技試験の始まりは爆炎と閃光と

試験当日、俺たちは初めて雄英高校に訪れた。

流石、倍率300倍はあるだけあって、最新鋭の技術で作られた校舎はピカピカで、錆や変な汚れすら見当たらない。中学校と比べれば雲泥の差である。

「うおお…デケエ！広い！新しい！！ここが雄英高校か…生で見るのは初めてだな…」

「ウチもだよ…つか、人多すぎ…もしかしてこれ皆受験生？」

人の多さに呆然としていたら背中に衝撃が…

「うわあっ！すすす、すみません！前方不注意でしゅた！」

(噛んだな)

ぶつかってきたのは緑がかった髪の毛にそばかすのある、どこか頼りない雰囲気を感じさせる少年だった。

「いやいや、こんなところで突っ立ってる俺の方が悪かったな。にしても、緊張しすぎだろ。実技試験もあるしリラックスした方が最高のパフォーマンスができるんだぞ？もつと力抜いとけ。」

「う、うん！ありがとう！僕は緑谷出久って言うんだ！…えつと…」

「あー、榊 悠真な。んでこっちの女子が耳郎響香。そろそろ始まるし、さっさと試験会場行かないと間に合わないよ？」

「ああ!!もうこんな時間！急がないと!!」

そうして走り去っていく出久。途中で足がもつれて倒れそうになったが女子が個性で浮かせて助けていた。

良かったな出久。受験する前に縁起の悪いことにならなくて…そもそもあんな落ち着いてない状態で受かるのか？まあ、今は自分の心

配しないとか…

「悠真、ウチらも急がないと…」

「ああ、そうだな！やっべえ、ウズウズしてきたぞ！もうスキル解禁だつて言われたしな！何が来てもオツケー！」

「悠真のそれってもう個性が複数あるようなものだよね…」

「何言ってるんだ、これはあの悪夢のような特訓の賜物じゃい。さ、そろそろ行くよ！」

—————

—————

—

うん、筆記試験簡単だったな。日本史なんか年号のオンパレードだったし…良く勉強してないと分からない問題だったけど特に問題は無いな。

普通の入試で年号ばつが出すとは思わないと思うけどなあ。雄英問題の出し方イヤらしいな。

「なあ響香は何が高得点取れそう？」

「うーん、ウチは数学かな。苦手だったのを総復習して頭に叩き込んだし、何より手応えがめっちゃあるから。」

そんな話をしていたら、どうやら実技試験の説明が始まるようだった。

『今日は俺のライブにようこそー!!!エヴィバデイセイハイ!!!』

普通、入試中のピリピリとした雰囲気の中でコールに答えるものはないだろう。しかし、そんなことを考えない悠真は違った。

「ようこそおおおおお!!!」

『『『………』』』』

『H A H A H A！返事をしてくれたのはたった一人だけ!!こいつあしヴィー!!!ありがとうたった一人の熱いリスナーよ!!んじや、実技試験

の概要をサクッと説明するぜ!!アユーレディ!!?』

「いえああああああ!!」

明らかに場違いな呼び掛けに答えてしまう悠真の周りの生徒は不機嫌な顔を隠そうともせず睨み付けていた。

実技試験の内容としてはこんな感じ

雄英の中の市街地を模したフィールドの中にて演習を行う。演習場には強さによってポイントの違う三種類の仮想敵が設置されている。それを叩き潰す簡単なゲーム

「あれ?ねえ悠真、仮想敵って四種類って入試要項に書いてなかったっけ?」

「ん?そうだった?..忘れた。」

どうやらそれに気付いた他の生徒がプレゼントマイクに質問していた。どうやら四種類目もあるみたいだ。0ポイントなのにマリオで言うドツス的なお邪魔虫《ギミック》ってことは倒せないってことか?

「うん、四種類目もあったみたいだね...って、悠真?何でニヤケてんの?」

「ん?いやあ、それ倒したら経験値おいしいだろうなあって思ってた。強いけどロボットってことは...うん。壊そうかその0ポイント。壊すしかないね。競争相手もないみたいだし好都合だ。」

「そんなこと考えるの悠真だけだとおもうよ...?」

プレゼントマイクの説明による説明は既に終わりを迎えようとしている。

ヒーロー科に入るに当たって一番重要であろう実技試験:周りを見渡せば、顔をうつむかせる者、膝を震わせる者、欠伸をする者、様々である。

プレゼントマイクはそんな受験生たちに雄英高校の校訓を送った。

『更に向こうへ……“Plus Ultra”!!!それでは皆!良い受難を!!』

「響香、絶対に受かるぞ…ヒーローへの第一歩だ!!」
「うん!」

あ、そうだったな、俺のステータスをまだ紹介してなかったな。はいこれ。

《名前》榊 悠真

《個性》ステータス

level:28

《体》2050(400)

《MP》3600/3600

《力》2000(380)

《速》1480(250)

《技》2800(600)

《ジョブ》

JP:28

《スキル》

SP:84

無し

次のレベルアップまで後 180000

※()の中のは個性未発動の時の基礎数値

ってな感じかな。これからスキル取得するからちよつと変わってくるかも。ちなみにこの数値が皆と比べてどうなのかも分かってない。

まあ、今はとりあえず…

仮想敵のことだけを考えるとこうかな…

※ ※ ※

実技試験を行う会場に案内された俺は中学校の体育技に着替えて準備体操をしながらスキルのどれを取るか迷っていた。

俺はまあ、身体能力はレベルの効果で接近戦は大丈夫なはず。

だから今の俺に必要なのは遠距離攻撃か範囲攻撃、防御、回避が出来るスキルのどれかだな。

つつてももう決まってるんだけどね。

俺が取るのは「雷魔法」。その名の通りに雷を操る個性らしい。親父曰く電気系統の個性は勝ち組なんだとか。ジゴス？ーク、ギガ？ラツシユとかもう、最高すぎ。あ、あとついでに携帯ゲームの充電も出来るからね笑。とか言ってたけど…羨ましいの絶対後者の方でしょ父さん…

あとラノベ？なるものに神経に雷を伝達させてバカみたいに反射速度上げるやつとか雷纏わせたり球状にしたり槍状にしたりしてぶっ放したりするらしい。

応用として磁力を扱う人もいたし…

なんか雷魔法の欄に《想像力にて雷を操ることが出来る》って書いてるから恐らく出来る。やるしかない。必要SPは…20!!1レベルで3ポイントだから約7レベル分か…高いなあ…まあ、扱い次第で強力になるからいいかな。もう一つのスキルで改善されるし。

もう一つは「SP取得3倍」。「経験値取得」の増加系統もあつたけど、俺は思ってたんだ。今でさえ異常な身体能力はレベル上げればさらに化け物級になるけど、特殊能力的なところは特訓しても取れない。つまり、スキルの方が将来的に重宝するようになるんじゃないかってね。

ちなみに必要SPは40。なんと約13レベル分のSPが持つてかれる。しかしこれからは3ポイントではなく9ポイント。レベル

4つ上げればお釣りが来るのである。なんとまあお得なことか。

取得が終わって自分に何かが入りこんでくる感覚…レベルアップの時と同じ充足感…。また一つ強くなったと実感できる。

「やっぱりこれほど気持ちいいものは無いな…」

端から聞かれたらヤバイセリフにしか聞こえない。

「にしても、響香とは別会場なのか…同中どうしの協力を防ぐためらしいけど、見てほしかったなあ新しい力！」

少しテンションが上がっていたのが悪かったのか他の人から怒鳴られた。

「るっせえぞこのモブが!!モブはモブらしく引っ込んでろや!!」

その声のせいで多くの受験生たちの視線が俺と怒鳴ったやつへ向けられた。

なんとまあ、初対面の人によく罵詈雑言浴びせれるな。不覚にもイラツと来ちゃいました僕。

声のする方を見ると、凶悪なほどにつり上がった目。鳥の巣みたいに爆発してツンツンと尖った髪、

すごい悪人面だね。ヒーロー志望なの？ヴィランじゃないの？

「ああ、悪かったな。入試受けるんでしょ？そんな肩肘張っていると動きが悪くなるよ…」

「話しかけんなクソがっ！俺はいつでも動けるわ!!」

理不尽すぎるなあおい。本当に初対面かな。あれ、見覚えあるなコイ

ツ…

「ん？お前どつかで見たことあると思ったらへドロ事件の…」

「ツ！うるせえ!!黙ってる!!ぶっ殺すぞ!!」

「はいはいはい、ヒーロー目指すならそんな言葉使いたない方がいいよ…ヒーローなってから人気無くすからね。」

「ふざけんな！出しまくるわ！」

そんな会話を交わして意気投合？した後に彼は深呼吸して目を瞑り落ち着いていた。

さつきまで怒鳴ってたやつとは思えないな。集中しまくってるね。よし、邪魔しよう。怒鳴られた仕返しだ。ほっぺっんっんしてやろう。

そうやって近づいた瞬間、

「ハイ、スタートー!!!」

プレゼントマイクの声が模擬市街地に響いた。

それと同時に鳥の巣頭は後方に両腕を伸ばした。

そう、僕がいる方向にである。

「爆速ターボっ!!!」

「え、ちよっ! 『纏・雷電』!!」

※ ※ ※

一部始終を見ていた他の受験生はいまだに固まっていた。

(あれ? あいつ失格じゃね?)

(いや、でも彼もちよっかい出そうとしてたし自業自得じゃね? あいつも集中してたみたいだしな。)

(どっちにしろ当たってたらあいつ退学だろ)

そんなことを話していたら、辺りに雷鳴が轟いた。

B a s h u n !!! B a z z z z z z z z !!!

「あ、あ、危、危ねえ!! 意外と範囲狭くて助かった:

…フ、フフフ…ちよっと…ほんとにちよっとキレイたぞ…あんの鳥の巣頭あああ!!!」

恐らくあの凄まじい爆撃を避けたのであろう。その証拠に衣服には焦げ跡一つついていなかった。少年は雷の如く凄まじい速度で彼を追いかけていった。

(まじかよ！あれ避けんのかよ！)

(化け物かよ！)

(うわあ、スゴイスゴイ！)

それらを見て呆然としてる生徒たちにプレゼントマイクは発破をかける。

『どうしたあ!? 実戦じゃカウントなんざねえんだよ!! 走れ走れえ!! 賽は投げられてんぞ!?!』

実技試験の幕開けである。

実技試験!!

「はっはあ!!!何これ何これ!!雷すげえな!初めてでこんなに制御できるのは中々無いんじゃないか!」

全身を雷と化した少年は喜悦の表情を浮かべ一人の少年を追っていた。とは言っても、入試開始から10秒も経っていないのだが、既に距離はぐんぐんと縮まっている。

B a z z z z z z z z z z !!!
B a s h u ! B a s h u n !
B o o o o o m m !! b o m b !! b o m b !!

雷鳴と爆発の轟音がさらに会場を震わせる。

その二つの音源は縮まっていき、重なり、追い越した。

僕はさっきの仕返しを含めてめっちゃ腹の立つ顔で挑発してやった。

「やあ、さっきぶりだね爆発魔!^{ボンバーマン}お先に失礼するよ!!」

隣を飛行する鳥の巣頭は一瞬驚いた顔をしたがすぐに目をつり上げて言う。

「待てやこのクソモブがあああああ!!!」

「さつきからモブモブって…僕からしたら、君の方がモブにしか見えないなあ…」

傲慢そうなプライドをへし折るため、トドメとばかりに速度を全速力で上げると一気に景色が後ろに流れていった。

速すぎて彼の顔を見れなかったのが残念である。

さてさて、市街地のスクランブル交差点?らしきところに1P、2P、3Pの仮想^{けい}ヴィラン^{けんち}がウジャウジャと湧いていた。ざつと20匹くらいだろうか。

「標的ホソク!!!」

「ヒーローブチコロス!」

「ウチマクレ!!」

上空にいる僕に向かって球を打ち出してくるが雷の速度で避ける僕を捉えることはできない。考えなしに撃っていたのか、全員が弾切れを起こしてリロードをしているところであった。

「景気付けに1発デカイの行つとくかね…あ、でも市街地に被害が出ないように調整してつと…『雷雲招来』!」

模擬市街地である、偽物の空に本物の雷雲がどこからともなく表れる。いつの間にか空は雷雲で覆われ、夜のように暗くなった。

「いけ! 『雷神の怒り』!!」

夜のような空間に、神の裁きとしか言い様のない、極太い一条の雷が降り立った

B a n n n n n
g g g g g g g g g g g
!!!!

鉄で出来た仮想敵は雷の高圧電流に耐えられるはずもなくショトし爆発した。

「ひゃー、電気系統の個性が勝ち組だったのが良く分かるな。攻撃のスピードが速いし使い勝手が良い…。」

レベルアップまであと80000!!かなり減ったな。100000か…一匹につき5000?美味しい美味しい。壊していいってのは本当に好都合だね。どんどんいこうか。

ーーーーー

ーーーーー

ーーー

爆豪 s i d e

丨

雷を纏う彼に追い付けないことを悟った彼は諦めて、近場にいる仮想敵を爆破していた。

何だあんのクソモブがあああああ!!!モブは俺の前を行くなよ!!
俺が特別なんだ!!!一番だ!!!他は認めねえ!!俺が1位なんだ!!!

「標的ホソクー」

「ブッコロセ!!」

後ろから迫ってくる仮想敵を見ずに爆撃する。

「俺は…負けねえ…!!!」

直後、空が暗雲に包まれた。その暗雲には雷が迸っており、市街地の中心辺りに集まっていた。

もしかして、あいつが…!!またあいつが!!!

白い光が辺りを覆った後の鼓膜が破れそうな轟音

圧倒的な力

あれだけで自分とアレとの格の差を思い知らされる。

だが、彼のプライドが認めようとはしなかった。今まで自分こそが1番強い、特別であると思っていた。だからこそ、自分を越える存在が同年代にいることを認められなかった。

!!!
奴と戦って勝てば…俺の方が上だ!!そのためには…雄英に受かる

彼は目的のために、また一機、また一機と爆破していくのだった。

—————

—————

—————

MPの消費を抑えるため「雷魔法」の使用は休憩して、「ステータス」のみで戦った。MPが3600から2100に減っていた。多分雷神の怒りが1000で纏・雷電が5分で500かな…。結構消費多いな。これからはMP増やそう。うん。

あとさ…ロボットの鉄つてもっと固いんじゃないの?アルミ缶みたいにペキヤツつてなるんだけど…最後の一匹いい!

「ふいいー…なんかもうここら辺仮想敵いなくない？経験値い…経験値を超越せえい!!…あと3万でレベルアップ！いくぜ29レベル!!」

地面を蹴って次の仮想敵を探そうとしたとき、地面が揺れた。

「ん？なんだ地震か？」

それは地震ではなかった。未だに人が多いであろうスタート地点も市街地の中心地の真ん中辺り、そこに遠くからでも見えるバカデカイ鉄の塊が存在していた。

そう、0ポイントの仮想敵である。

徐々に体が熱くなっていくのが分かる。

「おいしい経験値、見つけた♪…『纏・雷電』！」

B a z z z z z z z z z z z z z z z z !!

ビルや仮想敵がどんどん後ろに流れていく。やっぱり速い…

その証拠にほら、もう着いちやう。

0ポイントによって建物が破壊され、受験生たちが必死に逃げ惑っているのが見える。

ツ!?瓦礫の下敷きになってる奴がいる!?他の奴は助けようとしてろよ!それでもヒーロー志望か!

B a s h u n !!!

「おい!大丈夫か!」

いきなり現れたように見える俺に多少驚きながら

「ケロ、大丈夫じゃないわね。足が挟まってしまって取れないわ。このままじゃ轢き殺されたカエルになっちゃうわ。」

「ハハハ、冗談でもやめてくれ。今助けるよ…っと。」

感電しないように雷魔法の行使を止めて力だけで瓦礫をどかす

「ケロ、ありがとう雷の人、私は蛙吹梅雨って言うの。梅雨ちゃんって呼んで。」

「ごめん、梅雨ちゃん自己紹介は後にしよう。今はこれの^{0ポイント}の方が優先だ！他にも逃げ遅れてる人がいたら救出して避難させて！僕はこの注意をひきつける！」

引き付けるといふか、仕留める気満々だけどね。

最後の一撃のためにMPは使わない。馬鹿げた身体能力だけで0ポイントの体を駆け上がる。

巨大な手が俺のことを潰そうとしてくるが、日々の訓練で培った反射能力で安全範囲に逃げていた。

0ポイントは俺が離れたことを確認するとミサイルを撃ち込んでくる。

「ふっ！はっ！よっ！おわっ！危ない！」

かなりの弾数が悠真に襲いかかるが全てを紙一重で避けていく。爆破の余波もあるのだが悠真のステータスのせいで火傷一つ負わない。

土煙と爆炎で見えなくなった隙について0ポイントは腕で叩き潰そうとしてきた。凄まじい重量のはずだが、悠真のステータスには関係ない。

煙を割いて上から迫ってくる拳を見据え、受け止める体制に…。

「フッ!!」

止まったには止まった…が…いくら悠真は大丈夫でも床の耐久力までは予期していなかった。

足首が地面に埋まった程度で助かった。

「受験生全員の避難が完了したわ！ってあなたピンチじゃない！」

「こんくらいはどうつてことない！梅雨ちゃんも離れて！デカイのかますよー！」

0ポイント敵は俺を押し潰そうとさらに力を込める…

膝まで埋まっちゃったよ…まあ、安定して打ちやすいからいいや。

雷魔法使用…

使用MP2000！

「天を穿ち、星を喰らうは雷龍なり！『天雷龍閃』!!」

紫電が俺の体を包み、しばらくの間その雷しか見てなかった。

俺が想像したのは体から雷の龍が放出されるイメージ。0ポイントより遥かにでかく、一飲み出来るほどだ。

俺は近すぎて視認できないが恐らく避難している皆からすればデカイ雷の龍が0ポイントを喰らっているところだろう。

やべ、MPの使いすぎのせいかな…すげえ眠くなってきた。まだ試験あるのに…

遠退いていく意識の中で2つの声が聞こえた。

『レベルアップしました。』

レベルアップのお知らせと

『実技試験、終了〜!!』

実技試験終了のお知らせだった。

ただいまのレベル、29…